

# AFS 8期 ML 記念文集



2020年11月

## 50年目の卒業生リスト

岡部光明

日々、迷惑メールがいやと言うほど着信するので、私のコンピュータではそれらを自動的に排除する強力な設定をしています。しかし、6年ほど前の年初のことですが、その中をすり抜けてきた海外からのメールが1通ありました。

「もしかして、あなたは1961-62年にコネチカット州ウエスト・ハートフォードのコナード高校の海外交換学生であったオカベミツアキに該当する方である可能性がありますか?」と。びっくりした。同高校では、1962年卒業生の現住所をできるだけ多く突き止め、2014年10月に開催する卒業後50周年記念集会に参加を呼びかけているのです、とメール発信者のK氏(面識はないが在学当時は同学年)の説明があった。果して、どのようにして私のメール・アドレスに辿り着いたのか?

私は、その記念集会に出席することは叶いませんでしたが、その後、少なからぬメールのやりとり。そして、同氏が年3回刊行し始めていた「卒業生ニュースレター」を介して、卒業後50年経過した友人たちの動向をかなり知ることができました。また、私の履歴と写真もそこに掲載してくれました(図1)。情報化、グローバル化の時代においては、何とということが起こる(それが可能となっている)のでしょうか。それとともに、この過程で驚いたことが幾つかあります。

### 多様性は力なり

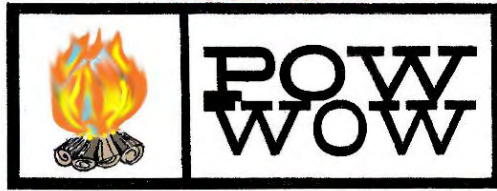
一つは、この母校の性格、ないし文字通りスクール「カラー」が一変していたことです。同高校は、私が在籍する4~5年前に郊外に新設された公立高校であり、当時のこのタイプの高校に典型的に見られるとおり、3学年(約1100名)のほぼ全員が「白人」でした(黒人学生はわずか2~3名いたに過ぎなかった)。

しかし現在、同校のウェブサイトを見ると「Diversity is Strength」(多様性は力なり)を何と学校のモットーとして掲げているではありませんか。程度はわかりませんが、おそらく黒人やいわゆるマイノリティが「非常に」増えていることは想像に難くありません。アメリカ社会の50年間における変化に驚いたわけです。



Vol. 2 No. 1

The 62 Alumni



Published by The Conard High School Class of 1962

CONARD  
High School  
Class  
Of 1962  
Alumni

March 2014

Page 1



Say Hello to Mitsuaki Okabe

By Dick Kinsley

In January of this year we were fortunate to make contact with our class of 1962 AFS foreign exchange student Mitsuaki Okabe. I believe the surprise was mutual when we exchanged emails in mid January. Efforts had been made prior to our 50<sup>th</sup> reunion in 2012 to locate Mitsui, but they were unsuccessful.

Mitsu is now retired after a very successful, distinguished and well traveled career. Mitsu and his wife Michiko live in Yokohama and have a son, Koichiro who is working in Tokyo, and a daughter Akiko, who is married to an American and living in Princeton NJ. Mitsu and his wife are Grandparents to Akiko's three children.

Mitsu says " I have had two kinds of professional life in my career. I first worked as an economist at the Bank of Japan (central bank in Japan, the Japanese counterpart of the U.S. Federal Reserve Bank), for twenty years. Then I moved to an academic community and taught, 20 years altogether, at University of Pennsylvania and Princeton University in the U.S., one year each, and Macquarie University in Sydney for two years, before I came back to Japan to teach at Keio and Meijigakuin Universities."

Education: University of Tokyo, B.A. in Economics, 1968  
University of Pennsylvania, Wharton School, M.B.A., 1973  
Keio University, Ph.D. in Media and Governance, 2000

(Continued on page 4)

Elaine Switz Stevens says,



COME TO THE CELEBRATION  
BIG BASH 70TH BIRTHDAY REUNION

Save the date: OCTOBER 11, 2014

Jukebox with songs from 1957 through the 60's

Menu: Fish, Beef, Chicken, Veggies, Potatoes, Salad and Birthday Cake. Cash Bar. Casual Dress. Stay tuned for further details. Hope to see all of you there at Farmington Woods in Avon/Farmington, CT so mark your calendars.



平均寿命の短さ

二つ目は、同学年（62 年卒）のうち、すでに他界した人たち（ニュースレターでは判明分について氏名のほか、死去年月と年齢が掲載されている）が多いことをみて悲

しくなり、そして考えさせられたことです。

そのリストとみると、同学年（約 350 名）のうち既に約 100 名がこの世を去っていたのです。そこには、30 歳台～50 歳台という若い年齢で他界した方も少なくありませんでした。そして、私が在学時に懇意にしていた友人 17～18 名もこのリストに含まれていました。彼らの当時の姿が目には浮かび、胸がつまりました。

当時のアメリカは「豊かな社会」、あるいは、あこがれの幸福社会というイメージでした。ケネディ大統領が、われわれ 1961-62 年 AFS 交換留学生全員に対してホワイトハウス前で言葉をくれた時、まさにそういう感覚だったと思います。ちなみに、その時、私が撮った写真が図 2 です（ケネディの右下に写っている恰幅の良い紳士が AFS 創始者スティーブン・ガラッティ氏です）。

図 2



しかし、その後の同級生の生涯をみるとこのような結果になっている。いまのアメリカ（それはむろんかつてのアメリカを継承した姿である）は本当に、幸せな国にな

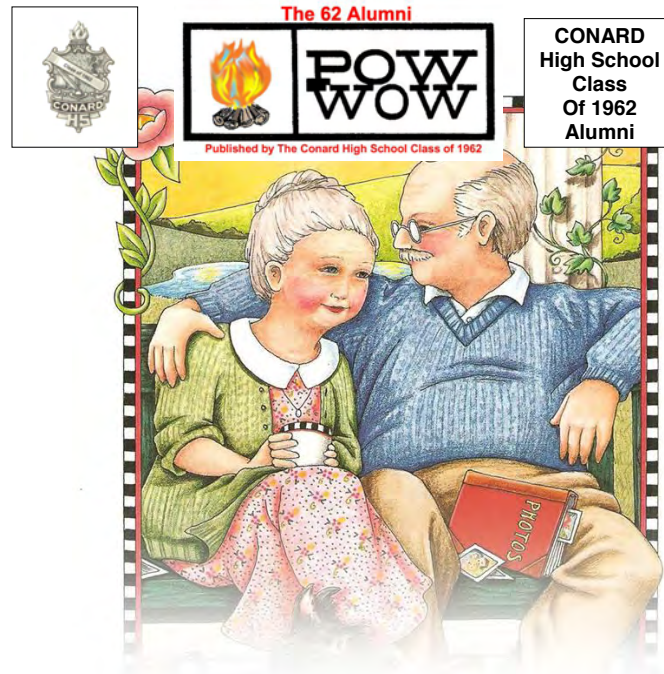
っているのでしょうか。

ちなみに、日米の平均寿命（0歳時における平均余命）をみてみましょう。2018年において日本は84.5歳です（世界2位。男81.1歳、女87.5歳）。これに対して、フライドポテトを好んで食べコカコーラをガブ飲みする傾向のあるアメリカは、先進国とはいえ78.9歳にとどまっています（世界38位。男76.3歳、女81.4歳。国連の2019年報告書）。この面での彼我の差異をみると、幸せな社会、あるいは目標にすべき社会とは一体どんな社会なのか、を改めて考えさせられた次第です。

### ニュースレターの見事な編集精神

三つ目は、ややローカルな話ですが、このニュースレターの編集精神にいつも感服していることです。そこには、同級生の消息のほか、コネチカット州へ帰郷した同級生が時折集まる昼食会（参加者の大半は女性）の様態なども報告されていますが、編集者は、なかなかよいセンスを持っています。図3をご覧ください。

図3



Just remember you can't put  
your arms around a memory,  
so hug someone you love,  
today.

なお、このニュースレターにこれまで登場してきた同級生は、もはや全員が現役から引退しています。しかし、私はなお現役時代の仕事（大学教員）を自発的に一部ながら引きずっています。3年前には、研究書『人間性と経済学-社会科学の新しいパラダイムを目指して』を刊行しました（図4）。その本の概要やそこでの問題意識と対応方向を書いたエッセー「主流派経済学への異議申立て」などは <<http://www.okabem.com/book/ningensei.html>> に一括掲載してあります。

図4



目先の生活プランは、その後書き貯めてきた6～7本の論文を編集して来年に最後の1冊を出すことであり、その後、完全に現役時代の仕事に決別しようと考えています。